

駒澤大学名誉教授

佐々木宏幹

偶感
あれこれ

8

「孤独(社会)」について
— 雑感 —仏教
企画
通信発行日 |
平成30年6月1日

52

発行所 | 有限会社 仏教企画
〒252-0113
神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5
Tel.042-703-8641
Fax.042-783-0989発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宣
Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

人生五十年の時代

人間五十年 下天のうちを
比ぶれば 夢幻の如くなり
一度生を得て 滅せるものの あるべきか

この唄は一般に、「幸若」とか「幸若舞」として知られるが、室町時代後期に、幼名を幸若丸と称した桃井直詮が、声明・平曲などの曲節を採り入れて創始した声曲とされる。織田信長が桶狭間で今川義元を討つため出陣した際に唄ったとされたことで有名になった。

信長が生きた十六世紀頃には、「人生五十年」が普通であったのであろうが、現代日本では、男性が八〇・七九歳、女性が八七・〇五歳である(二〇一五)。昭和・一桁時代に生をうけた私などは、幼少年の頃にはとても考えられない時代の到来である。

私事に関することで恐縮であるが、私は二歳で父を、そして三歳で母を亡くした。二人とも肺結核であった。その頃肺結核患者のいる家は、

「肺病タカリ」と呼ばれ、周囲の人たちから忌避された。「タカリ・たかり」は、漢字では「集り」であり、「あつま・むれ」を意味するから、病人が出た家は、家族のみならず親族や知人まで含めて、要注意の人たちと見られていたように思う。私は「独り子」であった。

私の父は三十八歳、母は二十六歳で逝ったが、他の家族でも若くして「肺病」で死去する人は少なくなかった。

肺結核は伝染病であるから、その一族は「被差別者」でもあった。小学校からの帰り道で、結核患者のいる家の前を通るときには、先輩に倣い、口を手で覆って走りだしたものである。

結核にかかっても経済的事情で入院できない人たちは自宅療養であり、年中ベッドに横たわっていた。そういう人たちは痩せ細って軽い咳をよくしていた。

軽い咳をする人たちには近づくなど大人たちからしつこく言われたものである。

「死に至る病」として恐れられた結核が恐れられなくなつたのは、太平洋戦争敗戦後である。それは私の知る限り、「ストレプトマイシン」なる抗生物質のお蔭であった。

この薬物は、一九四四年にアメリカのワクスマンらにより造られ、結核治療の道をはじめて開いた画期的なもので、以後の抗生物質開拓の端緒を成したと言われる。

今では「人生五十年」という表現は思い出深い死語にな

った感を深くする。みな長生きするようになったのである。平成二十九年一月に日本老年学会が発表した「高齢者の定義」によると、六十五歳から七十四歳までを「準高齢者」、七十五歳から八十四歳までを「高齢者」、九十歳以上を「超高齢者」と呼ぶのだそうである。

どうやらこの国は世界有数の「高齢者国」になったようである。

長生きの
「意味」について

世界有数の長生き国になった日本であるが、問題は長生きをした年月よりも、長生きをした「意味(内容)」がどうであるかにあるのではなからうか。

かつて八十歳を超えた人(男性)が「自分はもう十分に生きた。もういっお迎えが来ても結構だ」と語ったことを、私はよく覚えてる。

まだ「人生五十年」という人生感覚が強かった頃であるから、八十年も生きた人の語りは印象的であったのだろう。

その方は町長を何期か務め、町内では知らぬ人のいない程の人であったし、お寺の総代にもなったいたので、幼児の私は

「坊、坊」とよく声をかけられ、頭を撫でられたものである。この町長さんなど地方の有名人は「意味」のある生涯を送ったと言えるのではなからうか。

もつとも、長命であれ短命であれ、人生の「意味」は当人にしか分からないことであろう。八十歳、九十歳と長生きしても、自分の人生は不幸続きで何も善いことはなかったと考える人もあろうし、三十歳か四十歳で死去しても「わが人生に悔いなし」と感じる人もいようからである。

人生の「意味」はしよせん人それぞれであるといえようか。しかし、一般的には人は短命より長命を願うのが自明のようである。百歳以上の超高齢者になつてもなお元気で活動している人など、世間の大きな関心の対象であり、その人がどのような生き方をして



きたかをメディアが細かく詮索することがある。百五歳まで存命した日野原重明先生などその好例ではなからうか。日野原先生は敬虔なクリスチャンであったが、最後の病床に在っても早く恢復して医療を続けたいと述べておられたという。仏教者はどうであろうか。臨済宗の僧であった一休宗純、禅師は、人々から「一休さん」と「さん」づけで呼ばれ、親しまれた仏教者である。禅僧にもいろいろな方がいるのは当然であるが、どちらかと言えば豪放磊落、天衣無縫の人が多く見られているのではなからうか。一休禅師もその例にもれず、その言動は奇抜・風狂で知られていたようである。禅師が詠まれたという句に「正月や 冥土の旅の一里塚 めでたくもあり めでたく

もなし（一）（休咄）というのがある。頼智そのものではないか。正月は誰にとっても「おめでたい日々」である。それを「死への旅路の里程標」であるとすると、人々の常識のどんでん返しである。

「諸行無常」の意味を「色は匂へど、散りぬるを」と訳した伊呂波歌に通じているように思うが、「めでたくもありめでたくもなし」という締めがとても利いている。

このように生死を透脱し得たかに見える一休禪師であるが、「人間らしさ」を失ってしまった訳ではない。禪師が死の床で発した言葉は、「死にとくない」であったという（小滝ちひろ「悩み多き一休さん」を思う、「朝日新聞」二〇一七年一月二日（土））。

世間には、自分の部下を死に追いやっても、自分自身だけは生き延びたいと思う人が断然多いのではないか。特に戦時においておや。太平洋戦争の最中に実際にあった話を記そう。戦争の末期には特攻隊（特別攻撃隊）という陸海軍の部隊が編成され、特攻機の隊員は相手の艦船に体当たりをして自爆を遂げた。「特攻」は当時の常套語であった。

戦争末期に、フィリピンで激戦が続いたとき、陸軍の第六航空軍司令官であった菅原道大中将は、出撃する特攻隊員にたいし、「我々も続く。日本は必ず勝つ」と訓示し、部下を死の道に送り出した。ところが敗戦の八月一日

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独の人生」について

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

最後の特攻機に出動の準備をさせていた航空参謀の鈴木京大佐が「軍司令官閣下もご決心なさるべきと思います。鈴木もおとします」と進言した。

これにたいして菅原中将はこう答えたという。「死ぬばかりが責任をはたすことにはならない。それよりは、あとの始末をよくしたいと思う」。

菅原中将は敗戦後帰国し、一九八三年、九五歳で死去した（栗原俊夫「特攻―戦争と日本人」中公新書、二〇一五）。

部下には死を勧め、みずからは生き延びる。「生き意地が強い」と言うよりも「死に意地が汚い」例の典型であるようにも思われる。

いま私は部下を死に至らしめ、自分は長生きした菅原中将を、「死に意地が汚い」と述べたが、他方で私のこの表現は本当に正しいのかと、懸念がない訳ではない。中将は「自分には後始末という大仕事がある」と本気で考えていたかもしれないのである。

先に書いたように、人生の本当の「意味」は、「当人」にしか分からないことなのだろう。

もしもそうであるとすれば、人生は「孤独」であるという捉え方が俄然光芒を放つてくるように思う。

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ



「佐々木先生は親の真の愛情を知らずに育った方である」と語るのを聞いて大変ショックを受けたことがある。考えてみるとそのとおりであったかもしれない。「孤独」を生きて育ったことは紛れもない事実であるからだ。自省すると、私は他の人たちに比べて余計に「気遣い」する人間になつていたようである。つまり、親しく付き合った人たちを含めて「他人」を必要以上に意識するようになつていたらしい。何か事を為すにあたって、周囲の人たちが同じ方向に動こうとしているのに、私は常に彼らに同じで良いかどうかに迷い続けたということである。こうした態度は悪く言えば「臆病」とあり、良く言えば「慎重」となる。私は臆病で慎重な生き方を続けていたようである。生き方の基本は幼児の時に両親の「肌」を感じて身に付けるものである。私にはその「肌」が欠けていたのである。

既述のように周囲の人たちはそれを知って、私に憐憫の情をもつて接してくれたのだが、私にはそのことがかえって負担になつていたのである。つねに周囲に「気遣い」して生きるとなれば、どうしても「孤独」にならざるを得ないのである。行動に出る前に周囲の人々が自分をどう思っているかを観察しないではいられないからである。

これはある種の劣等感（コンプレックス）の反映なのだが、私はこれを脱却するのにかなり長い時間を要したように思う。

さきに引いた「孤独」には、①みなし子と、②ひとりぼっちの二つの意味があるが、私の場合、①は当たっているが、②は正確には当たらないと述べる理由を記した。しかしよく考えてみると、この高齢化社会に「孤独」でない人間がはたして存在するかということについても再三三考してみ必要があるのではなからうか。

最近、作家の五木寛之氏の『孤独のすすめ―人生後半の生き方―』（中公新書ラクレ新装刊二〇一七）を読んだ。氏は一九六七年に『蒼ざめた馬を見よ、仏教にも関心の深い作家である。氏は一九三二年生れであるから、本年（二〇一八）八六歳になられるはずである。立派に「高齢者」である。氏が言わんとしていることを私なりに要約すると以下のようにならう。

「老いにさしかかるにつれ、『孤独』を恐れる人は少なくない。体が思うように動かず、外出もままならない。訪ねてくる人もおらず、何もすることがなく、無聊をかこつ日々。世の中からなんとなく取り残されてしまったよう、寂しい、不安だし、人によつて鬱状態におちいりかねない。：私自身はもっとも群れるのが苦手、孤独に偏する性分だという面もあるが、歳を重ねれば重ねるほど、人間は孤独だからこそ豊かに生きられる

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

「孤独」の意味について『広辞苑』は「①みなし子と老いて子なき者。②仲間のないこ

けれども、そのあたりを意識して本づくりをしていかなないと、男性だけの視点だけではもう無理なのではないかなと気がしたわけです。弘法大師という方は、そういう意味では、珍し社会的な活動をした人ということもある、千二百年前のものをもし魅了せるとすれば、今申し上げた方向性しかないのではないかと、いうことになりました。

もう一つ、実はさっきまで女性の編集者二人と話をしたので社会規範というのは非常に重要になってくる。仏教はその部分に欠けるところが大きかったわけです。弘法大師という方は、そういう意味では、珍し社会的な活動をした人ということもある、千二百年前のものをもし魅了せるとすれば、今申し上げた方向性しかないのではないかと、いうことになりました。

もう一つ、実はさっきまで女性の編集者二人と話をしたので社会規範というのは非常に重要になってくる。仏教はその部分に欠けるところが大きかったわけです。弘法大師という方は、そういう意味では、珍し社会的な活動をした人ということもある、千二百年前のものをもし魅了せるとすれば、今申し上げた方向性しかないのではないかと、いうことになりました。

もう一つ、実はさっきまで女性の編集者二人と話をしたので社会規範というのは非常に重要になってくる。仏教はその部分に欠けるところが大きかったわけです。弘法大師という方は、そういう意味では、珍し社会的な活動をした人ということもある、千二百年前のものをもし魅了せるとすれば、今申し上げた方向性しかないのではないかと、いうことになりました。

もう一つ、実はさっきまで女性の編集者二人と話をしたので社会規範というのは非常に重要になってくる。仏教はその部分に欠けるところが大きかったわけです。弘法大師という方は、そういう意味では、珍し社会的な活動をした人ということもある、千二百年前のものをもし魅了せるとすれば、今申し上げた方向性しかないのではないかと、いうことになりました。

もう一つ、実はさっきまで女性の編集者二人と話をしたので社会規範というのは非常に重要になってくる。仏教はその部分に欠けるところが大きかったわけです。弘法大師という方は、そういう意味では、珍し社会的な活動をした人ということもある、千二百年前のものをもし魅了せるとすれば、今申し上げた方向性しかないのではないかと、いうことになりました。

もう一つ、実はさっきまで女性の編集者二人と話をしたので社会規範というのは非常に重要になってくる。仏教はその部分に欠けるところが大きかったわけです。弘法大師という方は、そういう意味では、珍し社会的な活動をした人ということもある、千二百年前のものをもし魅了せるとすれば、今申し上げた方向性しかないのではないかと、いうことになりました。

もう一つ、実はさっきまで女性の編集者二人と話をしたので社会規範というのは非常に重要になってくる。仏教はその部分に欠けるところが大きかったわけです。弘法大師という方は、そういう意味では、珍し社会的な活動をした人ということもある、千二百年前のものをもし魅了せるとすれば、今申し上げた方向性しかないのではないかと、いうことになりました。

もう一つ、実はさっきまで女性の編集者二人と話をしたので社会規範というのは非常に重要になってくる。仏教はその部分に欠けるところが大きかったわけです。弘法大師という方は、そういう意味では、珍し社会的な活動をした人ということもある、千二百年前のものをもし魅了せるとすれば、今申し上げた方向性しかないのではないかと、いうことになりました。

もう一つ、実はさっきまで女性の編集者二人と話をしたので社会規範というのは非常に重要になってくる。仏教はその部分に欠けるところが大きかったわけです。弘法大師という方は、そういう意味では、珍し社会的な活動をした人ということもある、千二百年前のものをもし魅了せるとすれば、今申し上げた方向性しかないのではないかと、いうことになりました。

けれども、彼らの本音は、みんな生きていきたい。死にたいとは口で言っているだけです。正木 ちよつと関係するのかわかりませんが、第二次世界大戦中だったと思うんですが、戦場で兵士が敵に向かって発砲しますよね。例えば百人いると、何人ぐらいが実際に撃ったか。敵に遭遇したとき、実際に撃ったのは半数以下らしい。そういう統計があって、実は相手を殺すというのとは相当怖いらしいんですね。切羽詰まった状況でも引き金を引けない人は多いそうなんです。それよりは自分を殺してもらったほうが楽だという話もあります。

正木 人間ってやつかいですね、そういう意味ではとても藤木 今のお話をうかがっていて、僕は個人としてのアイデンティティーが非常に危うくなっている時代だと思います。そんな状況だから、篠原さんがおっしゃるようにふらふらした大学生が増えてくる。仏教系の大学といいますが、ここでははつきり駒澤大学に対する注文として、現状に対応したメッセージをきちっと出すべきだと思いますね。

駒大のお寺塾のネットワークを

駒大のお寺塾のネットワークを

駒大のお寺塾のネットワークを

駒大のお寺塾のネットワークを

駒大のお寺塾のネットワークを

駒大のお寺塾のネットワークを

駒大のお寺塾のネットワークを

駒大のお寺塾のネットワークを

行きましたが、若い三十代ぐらいの人たちが古民家を活用したり、あるいは地元のお寺さんとか神社の連中と組んで私塾をする。そうすると、そこで師弟関係が生まれる、一回こっきりじゃなくて、継続的な形でできるわけです。よく考えてみると、大学というのは昔、私塾でした。そういう形で、曹洞宗のネットワークを使って、駒大の中に私塾を作っていく、私塾イコール末寺であり、つまりお寺である。そこに一つの面白いアプローチができるんじゃないか、実はずっと思っていたことなんです。

細川 全く同感です。そこで一つ提案をしたら、これは藤木さん、あるいは篠原さんがなさっている活動をそのまま駒大の中に置いてしまふ。そして両寺院だけではなくて、お友達、お知り合いのお寺さんにお声掛けをいただいて、それぞれの寺が学生を誘ういろいろなプログラムを作っていく、それをメニュー化して、大学はそれを学生に告知するだけでいいよ。ですから、大学はそれほど手を掛けずに済むわけですね。そうすると、駒大に入れば、東京近隣の何百というお寺さんでいろいろな活動ができる。例えば、藤木さんのところでは、施設の子供たちと交流できるでしょうし、長寿院さんに行けば、生と死ということを考えるセミナーをやってくれます。あるお寺では哲学講座をやっているとか、また別の野外活動をやっているお寺

行きましたが、若い三十代ぐらいの人たちが古民家を活用したり、あるいは地元のお寺さんとか神社の連中と組んで私塾をする。そうすると、そこで師弟関係が生まれる、一回こっきりじゃなくて、継続的な形でできるわけです。よく考えてみると、大学というのは昔、私塾でした。そういう形で、曹洞宗のネットワークを使って、駒大の中に私塾を作っていく、私塾イコール末寺であり、つまりお寺である。そこに一つの面白いアプローチができるんじゃないか、実はずっと思っていたことなんです。

細川 全く同感です。そこで一つ提案をしたら、これは藤木さん、あるいは篠原さんがなさっている活動をそのまま駒大の中に置いてしまふ。そして両寺院だけではなくて、お友達、お知り合いのお寺さんにお声掛けをいただいて、それぞれの寺が学生を誘ういろいろなプログラムを作っていく、それをメニュー化して、大学はそれを学生に告知するだけでいいよ。ですから、大学はそれほど手を掛けずに済むわけですね。そうすると、駒大に入れば、東京近隣の何百というお寺さんでいろいろな活動ができる。例えば、藤木さんのところでは、施設の子供たちと交流できるでしょうし、長寿院さんに行けば、生と死ということを考えるセミナーをやってくれます。あるお寺では哲学講座をやっているとか、また別の野外活動をやっているお寺

行きましたが、若い三十代ぐらいの人たちが古民家を活用したり、あるいは地元のお寺さんとか神社の連中と組んで私塾をする。そうすると、そこで師弟関係が生まれる、一回こっきりじゃなくて、継続的な形でできるわけです。よく考えてみると、大学というのは昔、私塾でした。そういう形で、曹洞宗のネットワークを使って、駒大の中に私塾を作っていく、私塾イコール末寺であり、つまりお寺である。そこに一つの面白いアプローチができるんじゃないか、実はずっと思っていたことなんです。

細川 全く同感です。そこで一つ提案をしたら、これは藤木さん、あるいは篠原さんがなさっている活動をそのまま駒大の中に置いてしまふ。そして両寺院だけではなくて、お友達、お知り合いのお寺さんにお声掛けをいただいて、それぞれの寺が学生を誘ういろいろなプログラムを作っていく、それをメニュー化して、大学はそれを学生に告知するだけでいいよ。ですから、大学はそれほど手を掛けずに済むわけですね。そうすると、駒大に入れば、東京近隣の何百というお寺さんでいろいろな活動ができる。例えば、藤木さんのところでは、施設の子供たちと交流できるでしょうし、長寿院さんに行けば、生と死ということを考えるセミナーをやってくれます。あるお寺では哲学講座をやっているとか、また別の野外活動をやっているお寺

行きましたが、若い三十代ぐらいの人たちが古民家を活用したり、あるいは地元のお寺さんとか神社の連中と組んで私塾をする。そうすると、そこで師弟関係が生まれる、一回こっきりじゃなくて、継続的な形でできるわけです。よく考えてみると、大学というのは昔、私塾でした。そういう形で、曹洞宗のネットワークを使って、駒大の中に私塾を作っていく、私塾イコール末寺であり、つまりお寺である。そこに一つの面白いアプローチができるんじゃないか、実はずっと思っていたことなんです。

細川 全く同感です。そこで一つ提案をしたら、これは藤木さん、あるいは篠原さんがなさっている活動をそのまま駒大の中に置いてしまふ。そして両寺院だけではなくて、お友達、お知り合いのお寺さんにお声掛けをいただいて、それぞれの寺が学生を誘ういろいろなプログラムを作っていく、それをメニュー化して、大学はそれを学生に告知するだけでいいよ。ですから、大学はそれほど手を掛けずに済むわけですね。そうすると、駒大に入れば、東京近隣の何百というお寺さんでいろいろな活動ができる。例えば、藤木さんのところでは、施設の子供たちと交流できるでしょうし、長寿院さんに行けば、生と死ということを考えるセミナーをやってくれます。あるお寺では哲学講座をやっているとか、また別の野外活動をやっているお寺

行きましたが、若い三十代ぐらいの人たちが古民家を活用したり、あるいは地元のお寺さんとか神社の連中と組んで私塾をする。そうすると、そこで師弟関係が生まれる、一回こっきりじゃなくて、継続的な形でできるわけです。よく考えてみると、大学というのは昔、私塾でした。そういう形で、曹洞宗のネットワークを使って、駒大の中に私塾を作っていく、私塾イコール末寺であり、つまりお寺である。そこに一つの面白いアプローチができるんじゃないか、実はずっと思っていたことなんです。

細川 全く同感です。そこで一つ提案をしたら、これは藤木さん、あるいは篠原さんがなさっている活動をそのまま駒大の中に置いてしまふ。そして両寺院だけではなくて、お友達、お知り合いのお寺さんにお声掛けをいただいて、それぞれの寺が学生を誘ういろいろなプログラムを作っていく、それをメニュー化して、大学はそれを学生に告知するだけでいいよ。ですから、大学はそれほど手を掛けずに済むわけですね。そうすると、駒大に入れば、東京近隣の何百というお寺さんでいろいろな活動ができる。例えば、藤木さんのところでは、施設の子供たちと交流できるでしょうし、長寿院さんに行けば、生と死ということを考えるセミナーをやってくれます。あるお寺では哲学講座をやっているとか、また別の野外活動をやっているお寺

でも大丈夫です。でもそういう場所はなかなかないんですね、現実には。このてらこやは全く超宗派的です。そこそ教会も入っている場合もありますけれど、ただ一つ言えることは、そういう活動の中心になっていただいているお寺さんは、どっちかというと中央の権力機構とは無縁な人ですね。

熊本 それはどういうような形で広まっていきましたか。

正木 私と精神科医の森下一先生で始めたんです。森下さんというのは日本の不登校、引きこもり問題の第一人者として、当時の文部省が正式に認可した不登校のための高校を最初につくった人です。莫大な寄付金を集め、それで文部省に乗り込んで、生野学園というのをつくった。これをやっていくうちに、最初のうち親御さんたちは非常に熱心だったのが、十年ぐらいたつと親の態度が変わってきた。最初のころは何とか子供たちと一緒に手を携えて、自立していこうという意思があったそうです。それが十年後には、要するに預けておけばいいんだろうみたいな話になって、親が動かなくなってきたという。

そういう状況を見ていて、それにまた既に不登校になってしまった者を社会復帰させることは実は至難の業です。じゃあどうするかというので、対処療法ではなくて、不登校をつくらない活動にしようということですね。最初に私、緑があったものだから、鎌倉で始めました。一番最初に話に乗ってくださいたのが大仏さんでしたが、それから建長寺が乗ってくれたので、じゃあ一緒にやりました。そのうち鎌倉村のお寺が話に乗った。成功した理由はもう一つ、実働部隊を青年会議所（JC）が担ってくれたことです。結構JCの中にお坊さんがいるんですよ。

藤木 入っていますね。

正木 お金の面でも、JCの予算さんはご存じのように、単年度主義なんですけれども、そこはいろいろ便法を使いまして、通年連続でできるような予算措置をとってくれたり、いろんなことが重なってどんどん大きくなった。今はいわゆる政府の地方創生とうまく合ってしまつて、莫大な助成金ももらっているらしいんですよ。そういう形で広がったというのが大きいだろうと思います。ただ、基本的には子供たちのためのものなので、今お話の私塾的な方向性とはちよつと違う。

われわれのやったことの一つは、縦のつながりを創出することでした。今の子供たちは横のつながりしかないのです。小中高大をつなげようとしたわけです。お兄さんお姉さんと交わろうということですね。森下先生の長年の経験から、子供たちが自立するための大きな条件は、こういう大人になりたいと思わせるような大人と出会うことだという。それは横並びでは絶対無理なので、縦軸をつくらなければい

けない。今の教育は全部横並びです。結局、小学生の勉強を中学や高校のお兄ちゃんお姉ちゃんが見るとか、場合によっては子ども食堂も始めた。そういう総合的な力を動員すること、ここまで来たところだと思えますね。

吉澤 僕ら地域づくりをやっていると、小中高大をどうやってつないでいくか、悩みの種なんです。今おっしゃったような仕組みができて、お寺さんの連合がそこに入っていけると、本当の意味でつながりができてきますね。

正木 結果的には、大学生たちが非常に自信を持ったということと、それからさっきの話にちよつと戻るようだけれども、きちんと予算措置を取ったことです。つまりボランティアを持たない。最低でも、交通費を負担できるようなシステムをつくっておかないと、一回二回三回は来ても、四回五回六回は来なくなる。そのあたりはきちんと措置をしたということです。もちろんJCがかかわっていますし、いろんな有力なお寺さんがかわったことで、結構お金集めもしかりしました。

それから比較的早い段階で、専従の人間を抱えました。早稲田のゼミ生でしたが、やっぱり誰かちゃんと事務処理し続けることができる人がいないと、うまく回らないわけです。単なるボランティアではうまくいかないので、そこはきちつと専従の人を付ける。それから宗派も何も関係なく立ち上がったところから今日に至つたということですね。こういうことをやっている、親たちが結構乗ってくるので、今後はその親たちをどうするかという問題があると思います。非常に面白いと思つたのは、例えば建長寺で二泊三日の合宿をします。あそこは結構厳しいので、食事でも自分でよそわせる、食べられる量だけです。全部食べるまでみんな待っているのです。結構あはれはきつと思います。もちろん食事の作法もなにしろ禅です。合宿が終わって家に帰つて、お父さんお母さんがテレビを見ながら食事をしていて、テレビをつけながら食事をしてはいけませんと、子供に言われたという。（笑）

篠原 いいですね。先ほど内山先生が、何もお寺でなくてもできるのではないかと云われましたが、全くそうでした。今統廃合が進んで全国で小学校ががらがらですもの。私のところは三校小学校が空いちよつと、使いようがない、ところが完全に施設は整っているわけです。うちから十分ぐらいのところの一枚が空いていて、使つていいよ、と成田市長が言う。

細川 ちよつとだけ付け加えさせていただくと、私塾にあまりフォークラスしすぎなくていいと思うんです。さつき正木先生がおっしゃったように、いろんな活動でいいので、あまり私塾に凝り固まらないほうがいい。

正木 私たちがやっていた経験から言いますと、基本的にはもっとも早稲田のゼミからスタートしたんですね。最初は何年間か早稲田の学生だけだったんですが、特定の大学だけに絞ることのデメリットが出てきます。結果的には慶応でも何でも、神奈川県中の大学から何から全部自由にしましたけれども、そこで多少軋轢があった時期もある。本家はここみたいな雰囲気が出てきて、早稲田のある先生がそういうことを、どうしても自分のゼミ中心でやりたいと、そのことが大学内部での出世とかかわるようなことがどうもあるようでした。実績を挙げたいというのでしよう。

結局、それはまずいんじゃないのと、JCの人たちが徐々に圧力をかけたらしいながら、いろんなものをどんどん取り込んでいってしまったので、特定の大学にこだわらなければ全くなつたわけですから、今回の企画でも、駒澤大学と他の大学や組織との関係をやまく調整していく必要があると思いますね。

熊本 それが大事ですね。

篠原 私のところで一年か二年問題でしたけど、あとは全部地域のおじいちゃんおばあちゃんとか、ご夫婦とか、それから一番ありがたかったのは、東京のお寺さんにはちよつと難しいだろうけれども、われわれのところは農業地帯で、牛を飼っている人、豚を飼っている人がいっぱいいて

がある。それはお寺さんの好みとか志向性によつてそれと立案なさればいいので、お寺さん同士が語り合われて、それでメニュー化して大学にどんと提案したら、これは大学も無視できないでしょう。単位になろうがなるまいが、まずお寺さんで開講して、そこへ学生たちが自由研究で入ってくる。それが三年、五年続いたら、じゃあ単位を認めなさいということにもなつてくる。

ただしこれも順番というのが大事で、吉澤さんがおっしゃるような、大学内での私塾をというの、それは段階として自ずとそうなるけれども、大学というのは私自身も入つてみてわかつたのですが、本来の教育研究以外の業務がずいぶん忙しいものです。そんな中で本業の教育研究本来のしごと以外のものは敬遠したくなつたり大上段に抵抗感を持つ。一方お寺さんについても、むしろ個々のほうがいい声を上げたら、面白いねと言つてくれる方たちと始めると話が早いでしょう。

篠原 おつしやるとおりです。

開いていて、別に駒大の学生でなくてもいいし、曹洞宗でなくてもいいんですけれども、そうはいっても、あるムーブメントというのはコアがあったほうがいいわけです。コアは駒大の学生さんであり、藤木さんであり篠原さん、あと共鳴するお寺さん方であり、それがハブですよ。ハブの周りは、境界線はいまいいなほどよろしいという感じですね。ただし、推進力というのは絶対必要です。

吉澤 先ほどちよつと紹介した、岡山の三十代の人ですが、総社市で私塾をやっているんですよ、十年近く。それだけでは飽き足らずに、仲間が集まつて、じゃあ古民家の再生をやろうかというような話に広がっていく。岡山というのは昔のことを学べる教材がいっぱいありますし、曹洞宗も結構いて、黒住教とか、キリスト教団も強いところですよ。そういう連中が入ってくると何か面白いことが起きる。それは、全国的にもそういうネットワークができそうだと、そんな話になりました。

細川 おつしやるとおりで、それを今日の第二のテーマ、お寺の存在意義という話につなげるならば、お寺ってどういうところかという、私などはいいかげんなヤツなので、菩提寺は浄土真宗であり、正月には神社に行き、クリスマスにはミサに行ったりするのです。多くの一般の方々も多かれ少なかれ、そのような生活感を持っていると思います。そういう私たちにとって、お寺というのはコミュニティ

寺というのはコミュニティ・ハブなんです。それは死んだ両親とか、先祖とのつながりを求める場所であり、またそれは生きている自分の今の悩みを癒やしてくれる場所。そういうところがあつたらしいな、と。みんなそういう場所を求めているんですよ。そういうときにお寺が私塾になるという、そんな活動にはみんな飢えているわけですよ。要は、お寺というのはわれわれの生活すべてに関わるはずなのに、関わりなくなつていのお寺さんのほうがおかしいのではないか。素人目から見れば、そんなふうに思えてくる。

篠原 僧侶の意識は変わらなければなりません。今の僧侶はまだまだどつぷりと檀家制度なんていうものにしがみついている。檀家制度なんかとつくに崩壊しているんです。それだったら、かえつて私たちはもう一回、本来のお寺というものに立ち返るべきだと思つているんです。それは、生きている人たちが来るところであり、生きている人たちが生きている羅針盤を得る場所なんだということですね。

内山 お寺が羅針盤だというときには、過去と未来を持つていなければ駄目です。過去というの、日本の場合には先祖ということでもあるし、自分の過去でもあるし、歴史みたいなもつと抽象化してもいいんだけど、それがどこかに感じられる。もう一つの未来というのは、それが死後でもいいし、死後に自分の魂のほうじゃなくて、死後にあるであろう子孫の生活というかな、あるいはそういうものでもいい。

だから、何らかの形のお寺のいう未来というのは、人々が求めるものは死後の未来だと思ふんですね。ただの老後不安とかいう未来だったら、いろんなところが怪しげではあるけれども、コンサルタンティングしている。だから、人々がお寺に行こうという気持ちになるときには、お寺的な過去とお寺的な未来というのをどこに置くのかという、それがあれば、本当に宗派にこだわらなくて、何宗でもいいんだらうと思うわけですね。

お寺間のネットワーク構築のために

吉澤 お寺というのは、命がつながる場としては一番分かりやすいと思うんです。お墓参りにしても、形式的とはいへ三世代が集まつてお墓に手を合わせる。つながりがある程度分かりやすく受け入れられる場所です。

藤木 そうですね。ただ、これからを考えていくと、お寺の息子でも、意識のある人は何かやりたいとか、そういう思いは必ずあるはずですよ。ところが、自分のお寺ではなかなかできないというのが現状であつて、だれども何かが求めたい。そういうときに、今のお話にあつたように、何力寺かがスクラムを組んで、お寺でやれることというのは模索していく、そういう活動は僕

もやって行きたいですね。そういう活動の担い手となる若い人たちを育てるための私塾を、僕はやりたいと思つています。

だから、何らかの形のお寺のいう未来というのは、人々が求めるものは死後の未来だと思ふんですね。ただの老後不安とかいう未来だったら、いろんなところが怪しげではあるけれども、コンサルタンティングしている。だから、人々がお寺に行こうという気持ちになるときには、お寺的な過去とお寺的な未来というのをどこに置くのかという、それがあれば、本当に宗派にこだわらなくて、何宗でもいいんだらうと思うわけですね。

正木晃先生ご出演

こころの時代

放送予定

NHK Eテレ（教育テレビ）

4月～9月 第3日曜日 午前5時～6時

再放送 第3土曜日 午後1時～2時

学が多いところです。ゆくゆくは彼らに動いてもらいたいので、学生たちが集まれるような企画をまずたてて、そこから彼らもつという膨らませてくれることを期待したい。そういうようなことを今考えていますね。若い人たちが自主的に、これもありじゃないかと、そういうようなことをやってくれる組織づくりといえますか。

熊本 組織づくりをきちんとしていくことが、長続きする秘訣でしょうね。

篠原 地域が動き始めますから、必ず。

きるというのは、何よりもこのネットワークでなされることの強みだと思います。

もう一つ、拝察するに、お寺さんや住職さんによつては、自分の寺でやろうということとろまで踏み切れない方もいらっしゃるでしょう。初めから「おたくのお寺ではどんなプログラムをやっているの？」とハードルを上げるのではなくて、「うちの寺のプログラムを手伝いに来てよ」といいんです。そういうお寺さん間の連絡もオープンで自由にしておくと、そこから「やっぱうちもやりますわ」というお寺さんも出てくるでしょう。藤木さんや篠原さんのお寺のような中心となるお寺さん、それから周辺のお寺さんというふうになつてくれば、むしろかなり自由闊達なものが出てくるはずですよ。

軽いプログラムなら、うちの寺でもやってみようかな、みたいになるでしょうから、そうすると互助も動き始めて、すごくいい感じになるんじゃないかなと思います。

鎌倉てらこやが成功した理由

正木 以前、お話ししましたとおり、私たちが「鎌倉てらこや」を始めて十三、四年になります。今全国五十カ所ぐらいになって大きな組織になりました。これが成功した理由はいくつありまふたつです。まずお寺を使つたことです。お寺はとにかく建物と境内がある、多くの人数が入つ

当日は朝から天候に恵まれ、春爛漫の陽気です。気温もぐんぐん上がりはじめたお寺への道中、額に汗がにじみまします。参道の入口は、商店街沿いの道を進んだところにあります。交差点に立つ看板が目に入ります。案内をたよりに矢印の方向を見ると、そこは山門に続く広い参道。「花まつり」と染められたたくさん



仏教企画 小野崎 裕宣

熱気の中で取材を始める、一角には野点傘の立つ静かな空間が。お茶を立てています。賑やかな境内にも、その厳かさには静かに調和しています。肩肘張らず気軽ににお茶とお菓子をいただきたい、ホッとすると、お顔を。会館に目を移すと、駒澤大学相撲部のみなさんと、子供たちとの取組です。大きな部

参道の先の山門の奥からは、賑やかな吹奏楽の音色が聴こえてきました。境内に入ると、そこは参詣のお客さまでぎっしりです。人の輪の中心には、朗らかなお声を響かせる枡野住職のお姿があらました。周りには、常に人が絶えません。

平年より早めの桜が舞い散る四月八日(日)、お釈迦様の降誕会この日、横浜市鶴見区にあります徳雄山建功寺様(枡野俊明住職)では、「花まつりフェスタ2018」と題して、活気あふれる花まつりが挙行されました。今号では、枡野住職のお話まじえながら、フェスタの様子を紹介いたします。

のぼり旗、そして道に広がる賑わいがすぐに目に飛び込んできます。交通整理のボランティアの方も、忙しく立ち回ります。駐車場にはいくつものテントが並び、物産や食べ物をもとめる参詣者で溢れています。特に目立ったのは、ご家族連れのお姿です。小さなお子さんたちが、親御さんや、おじいちゃんおばあちゃんに手を引かれて嬉しそうに露店をめぐります。中学生、高校生くらいの若い方も、たくさん連れだつて来られています。

活況に沸く境内の一角で、枡野住職にお話を伺いました。枡野師が話された一つ一つの言葉には、一過性のイベントでは終わらせてはいけないという深いメッセージがこめられていました。「花まつりフェスタ」も、当初から現在の規模で始まったものではなく、現代寺院が抱える大きな課題を、常に念頭に置きながらの出発であったと聞きます。現在のフェスタ

員さんたちに、最初は物怖じしていた子たちも、果敢にぶつかっていきまます。それを観ながら快哉をさけぶ声、そして笑顔、笑顔。朝一〇時の降誕会・人形供養会から始まったプログラムは、実に盛りだくさんで、そこに関わる皆さんも、多士済々です。ヴァイオリンの奉納演奏をされた演奏家の中村ゆかりさん、お子さんのメンパーも一生懸命踊ってくれた川崎市のよさこいチーム「輝樂」のみなさん。大学生の若いエネルギーも溢れます。駒澤大学からは、相撲部員のほかにアカペラサークルのみなさん、小さなお子さんへのパネルシアターでは淑徳大学の方が協力、鶴見大学からは吹奏楽部と軽音楽部。枡野師が教鞭を執る多摩美術大学からは、ベリーダンスやアフリカの民族舞踊ジャンベのサークルのみなさんが華麗な舞踊を披露されました。一服の清涼を楽しませていただいたのは、裏千家東京第二青年部のみなさんです。

暑かった日差しも西にやや傾きかけた頃、境内には涼しい風が通りはじめました。プログラムも終わりに近づきま

の姿は、都市部の大きな寺院だから可能な姿ではなく、試行錯誤と努力、そして実践が生み出す姿なのだと思ひました。寺院は、ご住職個人の志向や行動力が反映される場でもあります。一方で、個人で全てが完結することはもちろんありません。そこに関わる多くの方々とともに、全体の想いを結晶へと磨き上げていく、実践と実験の場でもあります。大変な盛況をみせた建功寺様の花まつりフェスタではありますが、続く一言を申されますが、続く一言を申されますが、枡野師の眼差しは深く、そして真剣でした。「たとえ盛況であつても常に課題はあるし、その課題とは向き合い続けなければならぬ」と仰います。そしてその課題、これからのテーマをお話ししてくださいました。それは、寺院は個として成り立つのではなく、寺院と地域・文化とを繋ぎ、そして寺院を、仏教を、現今の世代から次世代へと繋ぐ。枡野師の語るテーマは、「繋ぐ」という言葉に集約されていたと考えます。



たのしい露店めぐり



大きな相撲部員にお子さんたちが挑戦!!



春らしく飾られた花御堂



新緑の下 お茶とお菓子で一服

活気みなぎるよさこいソーラン

多摩美術大学の「ジャンベ民族楽器部」のみなさんが広場の中央で、躍動的なリズムにあわせて、飛び跳ねるようには舞い踊ります。二十一世紀の現代に在って、私には数百年も昔の寺院の姿を想像させられました。かつて寺院には多くの芸能者が集まりました。そこは、身体藝術を表現するための貴重な現場としてだけでなく、集う人々にとつては、口々に快哉を叫び、娯楽を享受する場でもありました。仏教寺院は、信仰とエンターテインメントとの不二の関係を保ちながら、常に開放された空間であつたはずなのです。ところがいつの頃からか、仏教寺院は閉鎖的な空間とし

て認知されるようになりました。少なくとも、寺院への全体イメージとして、開放的な印象は持たれていないようです。しかし、民衆の想いは、決して閉塞していません。寺院の門をくぐりたい気持ちは、実はいつの世にもあるはずです。寺院と地域、そして次の世代への連繋。その課題を解き始めるのは、まさに寺院の側ではないでしょうか。それぞれの寺院が同じ規模のものを実践することは出来ないかもしれません、しかし、その寺院オリジナルの「繋ぎ方」が必ずあると思えるのです。現代寺院の課題解決へのヒントを強く感じながら、帰り路に就く参詣の皆さまとともに、建功寺様を後にしました。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。藤木 必要ですね。情報交換とネットワークづくりということでしょうか。例えば、坐禅をしましょうとか、そういう軟らかい型というように、り方でやろうということに、結局そういうことで手を挙げてください。お寺がでてこないというところは必要だろと思えますよ。

『曹洞禅グラフ』145号(夏号)特集でノーベル生理学医学賞を受賞された大村智先生にお話しをお聞きする機会が得られた。印象に残るお話の一つには「祖母が私の無事をいつでも観音様に祈っていたくれた」「教育も研究も基本は人づくり」だとお話しに

なされた。さて、私達のお寺や僧侶には何の役目があるのだろうか。お寺は供養の場や祈りの場であり、人づくりの場ではないだろうか。

このところNHKや民放でも旅番組が多くなっている。その番組にはお寺や神社が多く登場する。その背景には歴史があります。見ていると静かな環境や草木が多く茂っている環境は人間を癒してくれている場でもあり、自分を尋ねる場にもなっているようです。お寺の環境は特に都会地に



住む人々には大いに大切なものです。その環境を大いに生かす座談会を『仏教企画通信』52号に掲載しました。今あるお寺の財産を活かす企画です。

昭和の時代から平成に変わり次の元号はまだわかりませんが、時代はどんどん変わっていく事を実感します。時代が変わるといえば、お寺の門をくぐる人たちにも変化を感じます。

昭和の時代はお寺の行事は村や町の行事に匹敵するものでみんなが参加すべきものだったのですが、しかし時代が進み今ではそれほどまでには受け留めて頂けないようです。横浜市鶴見区にある建功寺では今の時代に合った企画を立案し、今年の4月8日には「花祭りフェスタ2018」を開催されました。800人の参加者があったようです。年間を通じて様々な企画を打

ち立てておられるようですが、住職の枡野俊明老師は「いつでも試行錯誤を繰り返しながら試みています」とおっしゃっています。お寺の立ち位置は各寺違いますから同じようなことをする必要は全くありません。要はいつでも住職は「お寺の課題」を考えていると言うことです。

私は機会があるごとに、お寺との思い出はどんなことがありますかと。「昔、おばあちゃんと行きました。」「日曜学校に行き、仏様の歌を歌いました。」「住職のお話しがとてもよかったことを覚えています。」「とかです。このような思い出を語ってくれる人が少なくなっていくことを私はとてもさみしく思います。人づくりとはお寺に集う機会を多くすることでもあります。その機会が多くなれば人づくりに繋がるのではないのでしょうか。世直しでも僧侶に期待する声は多く聞かれます。私達は大いにその期待に応えたいものです。

仏教企画発行の刊行物（*部数により割引があります）すべて税別価格です

曹洞禅グラフ	
発行日	
春 彼岸号	2月20日
夏 お盆号	5月30日
秋 彼岸号	8月30日
冬 正月号	10月30日
1部 200円	
9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

『修証義』解説	丸山劫外著	1,400円★
『うたい継ごうよ、子守唄』	長田暁二・西館好子共著	1,200円★
『まんが問答一期一話』	文 平和宏昭 まんが 垣内敬遠	1,200円★
『道元禅より見たる般若心経解説』	長井龍遺著	2,200円
『葬送のしおり』	長井龍遺著	30円
修証義読本『生老病死』	須田道輝著	500円★
『曹洞宗檀信徒經典』	須田道輝解説	300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』	靈元丈法著	140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』	靈元丈法著	150円★

*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

仏教企画 新刊書のご紹介

ぶつねはんず 仏涅槃図の絵解き

高橋秀榮・平川恒太共著 A5版/16ページ(4色8ページ、1色8ページ)

定価(本体150円+税)
100冊以上ご購入の方は、本体価格より1割を引かせていただきます。

お申込み

〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
TEL: 042-703-8641 FAX: 042-783-0989 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

仏教企画

※ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客様番号(コード)になります。
お申込みは ①ご寺院名 ②お客様番号 ③電話番号でも可能です。

仏教企画通信

ご支援寺院名
H30.1.26~4.25

所在地	寺院名(個人名)	金額
神奈川県	正信寺	10,000
合計		10,000

手まり学園

寄附者御芳名
H30.1.26~4.25

所在地	寺院名(個人名)	金額
神奈川県	青木義次(54)	7,000
東京都	砂金智佐(90)	3,000
茨城県	龍泉院	10,000
東京都	小川匡夫	50,000
秋田県	円通寺	10,000
佐賀県	梶原玲子	5,000
神奈川県	中山佳則	1,000
東京都	慈眼寺	10,000
兵庫県	竜蔵寺	10,000
島根県	全竜寺	1,780
宮城県	光厳寺	10,000
神奈川県	熊坂公子	1,000
秋田県	歓喜寺	10,000
静岡県	定林寺	30,000
山形県	地福寺	50,000
愛媛県	昌福寺	10,000
佐賀県	晋恩寺	10,000
宮城県	喜松院	3,000
秋田県	満勝寺	10,000
神奈川県	正観寺	10,000
神奈川県	甲斐美佐子	50,000
兵庫県	瑞光寺	10,000
兵庫県	菩提寺	10,000
神奈川県	青木義次(55)	7,000
愛知県	東昌寺	10,000
北海道	荒澤道範	30,000
三重県	服部大晃	5,000
青森県	大乘寺	10,000
佐賀県	高傳寺	50,000
宮城県	龍澤寺	20,000
埼玉県	吉祥院	20,000
神奈川県	谷本順應	10,000
東京都	砂金智佐(91)	3,000
北海道	正覚寺	5,000
三重県	永昌寺	5,000
神奈川県	名切文梨	1,000
群馬県	長学寺	10,000
群馬県	祥雲寺	10,000
千葉県	宗胤寺	10,000
神奈川県	正信寺	20,000
神奈川県	青木義次(56)	7,000
静岡県	龍雲寺	10,000
愛知県	永澤寺	10,000
埼玉県	曹源寺	10,000
群馬県	永福寺	10,000
埼玉県	東昌寺	10,000
東京都	砂金智佐(92)	3,000
神奈川県	小野澤美代子	2,000
静岡県	宿蘆寺	10,000
合計		619,780